

海人伝承考

—「貝の道」譚復元の試み—

木 下 尚 子

はじめに

「貝の道」とは、弥生時代から古墳時代の約八百年にわたり、奄美・沖縄の大型巻貝を九州以東に届けた海上交易路のことをいう。連綿たる交易は、黒潮海域を専門に往来する海人たちを生み、ときに潮の香高い物語をも生んだであろう。以下は、こうした海人たちが語り伝えたと考えられる一つの説話についての試論である。物語がどのように生まれ、いかに伝承していったかを、文献と考古学資料をもとに検討してみたい。

一、問題の所在と方法

1 『古事記』の「比良夫貝」

『古事記』上巻に、伊勢の海辺で貝拾いをしてたサルタヒコが貝に手を挟まれて溺れる話がある。「故、其の猿田彦古神、阿耶訶に坐す時、漁為て、比良夫貝に其の手を咋ひ合さえて、海塩に沈み溺れたまひき。故、其の底に沈み居ます時

海人伝承考（木下）

海人伝承考 (木下)

の名は、底土久御魂そこどくみたまと謂ひ、其の海水の都夫多都時の名は、都夫多御魂つぶたつみたまと謂ひ、其の阿和佐久時の名は、阿和佐久御魂あわさくみたまと謂ふ。」(『古事記』¹) 訳：サルタビコノ神は、阿耶詞(三重県松坂市の西の地名)におられるとき、漁をしていて、ひらぶ貝に手をはさまれて、海水に沈み溺れなされた。それで海の底に沈んでおられる時の名は、底どく御魂といい、その海水が泡粒となつて上がる時の名は、つぶたつ御魂といい、その泡が裂けるときの名は、あわさく御魂という。²

「比良夫貝」はツキヒガイやタイラギ³、タチガイ⁴かとされるが、これらでは人の手を挟んで溺れさせるに至らない。これがサンゴ礁域のシヤコガイであろうことは、亜熱帯の貝を知る幾人かによつて早く指摘されていた。シヤコガイならば、人を溺れさせることができる。

2 シヤコガイ

シヤコガイは、生物学ではシヤコガイ科 Tridacidae の貝をさし、ヒメジャコ *Tridacna crossea*、シラナミ *T. maxima*、ヒレジャコ *T. squamosa*、シヤゴウ *Hippopus hippopus* などが含まれる。⁵ 肉はいずれも食用に適し、ヒメジャコ、シラナミは美味で、現在でも好んで生食される。手許の資料では、ヒメジャコは六cm前後、シラナミは一三cm前後、ヒレジャコは三〇cm前後の大きさで、それぞれ特色ある形状をなす。

シヤコガイは普通の二枚貝と異なり、貝殻復縁の上に蝶番を下にして、海底に立つような姿勢で生きている。貝殻本体から筋肉(足糸)がのびて、貝をサンゴ礁の岩に固着させているからである。足糸はヒメジャコ、シラナミにとくに発達しているため、これらの貝の採取には、足糸切断用のナイフが不可欠である。またシヤコガイはいつもある程度殻を開いていて、ここから青や緑・紫・褐色の外殻膜を波うつ襟のように出しているの、容易に見つけることができる。しかし貝の上に影が落ちたり、振動が伝わったりすると、たちまち殻を閉じ、暫時開かない。ヒレジャコやシヤゴウは枝サンゴの海底に棲むが、ヒメジャコとシラナミは潮干狩りのできるようなところに生息する。

ヒメジャコについては、個人的な体験がある。一九七八年沖縄諸島北西の具志川島で、ヒメジャコを採ろうとして不用

意に手を伸ばしたところを、土地の友人に厳しく咎められた。そんなことをしては手を挟まれ得るのが落ちだ、というのである。ヒメジャコは干潮時干上がるサンゴ礁の中に、穴をあけて入り込んで生息しているので、貝殻ごと取り出すのは至難である。私は貝が口を半開きにしているのをよいことに、中味だけを引っぱり出したのである。私の頭の中には、身が殻からつると出るカキのイメージがあった。そのまま手を差し入れていけば、私も「サルタヒコ」になっているところであった。シラナミも同じ様なところに僅かに凹地をつくって生息している。ヒメジャコよりは採取しやすいが、それでも素手の採取は無理である。貝塚を掘ると山のように出、当時常に市場に並んでいたシヤコガイの採取がじつはこのようであるとは、アサリやカキの採取しか知らぬ私には大きな驚きであった。

3 「貝の道」譚の予測

サルタヒコの話は、よそ者がサンゴ礁で潮干狩りをし痛い目にあつた体験談を下敷きにしており、その貝はヒメジャコやシラナミであつたに違いあるまい（補註1）。「比良夫貝」の名称は、殻を閉じる力絶大なる見知らぬ貝に対して、古代人が与えた力強い男性名称であろう。こうした限定された条件下のエピソードが、なぜ中央の神話に登場するのか。

南九州の海人が鎌を握っている、と私は思う。後に隼人と呼ばれる人々の一部は、紀元前から紀元七世紀頃まで、貝交易の前線で黒潮海域を往来していたと考えられ、シヤコガイの失敗談を生みかつ伝承するに相応しい歴史背景をもつからである。この話は、南島との貝交易で生まれたいわば「貝の道」譚に原型をもち、これが隼人を介して中央に取り込まれ、サルタヒコ潮死の話になった、と考えられないだろうか。

小稿では「比良夫貝はシヤコガイである」という前提にもとづき、前述の予測が歴史的に成立し得るか否かを検討したい。「貝の道」譚がどのように生まれ、伝承され、主人公がいかにしてサルタヒコに置き換わり得たのかを検討し、物語の発生と変化の過程を復元してみたい。はじめに文献に登場するサルタヒコと隼人を整理し、後半に考古学資料を用いて、物語を伝承した海人の実態を絞り込むことにしよう。

二、文献からみたサルタヒコ

1 サルタヒコ神話と南島に関するこれまでの指摘

サルタヒコ神話と南島の関わりについては、「比良夫貝」をシャコガイに比定することを含めて、いくつかの先行研究がある。

「比良夫貝」がシャコガイであることを最初に指摘したのは、瀧川政次郎である。瀧川は、サルタヒコを溺れさせたシャコガイは「大きなシャコガイ」、即ちオオジャコ *Tridacna gigas* であることを示唆している。オオジャコは殻長1mに達するが、生息地は東南アジア・太平洋地域に求めねばなるまい。瀧川が琉球列島のさらに南方の文化北上を想定していることは、続く文脈からも読みとれる。梶山彦太郎も、これがオオジャコであるとすると想定を、別に示している。

サルタヒコの名前については、早く伊波普猷が注目すべき指摘をしている。伊波は、「サルダの隣音転換であるサダルといふ言葉は、今も琉球の島々では使用されていて、それは先行する、案内するの意である」と指摘する。これは案内神としての役割を付与されているサルタヒコの名称を理解すにわかりやすい説であるが、異論もある。

谷川健一はサルタヒコゆかりの地名「阿耶訶」が、シャコガイの沖縄方言であるアザカイ、アジケーに共通することに気づき、また猿が貝に手を挟まれてしまうという民話がインドネシアに広く分布するという松前健の研究成果を根拠に、以下のような仮説をたてた。「インドネシア系の南方説話をもった人たちが沖縄をとおって、黒潮のまにまに日本本土に定着した。(中略)その説話というのは、猿がアザカ(シャコ貝)に手をはさまれて溺死するというものにすぎなかった。しかし、シャコ貝を呼ぶアザカという方言の意味は、いつしかわからなくなつた。そこでアザカはその説話をもつてをきた人々の住む海岸であるということになり、その代わりヒラブ貝を新しく登場させた。」「したがって、それが伊勢の阿耶訶を舞台にしたということはとくべつの意味もない」。また、「サダル神」↓「サルダ神」と音韻転化して、「猿」が生ま

れ、はるばる北上してきたインドネシア系説話と結合して「サル」の面をした先導神が、貝に手をはさまれて死ぬという一貫した説話となった⁽¹⁾とする。

谷川説には疑問がある。インドネシア系の南方説話が沖繩を經由して伊勢に定着するためには、これが琉球列島を一途に北上しなければならぬが、先島と沖繩諸島間の文化の往来が始まるのは、漸く一〇世紀である。サルタヒコ神話は遅くとも八世紀初めには大和で成立しているので、この検証は極めて難しいと言わざるを得ない。またこれが谷川のいうように、猿が貝に手を挟まれて死んだというだけの話であれば、何故はるばる北上して建国神話に入らねばならないのか、理解に苦しむ。

沖繩でシャコガイをアジャカ・アジケーと呼んでいるのは、その噛み合った口の形状がアジュン（交叉すること、アジマーになること）に当たるからである。「アジマー（交叉）のケー（貝）」という命名の背景には、物が十字に交叉することに呪力を認める思想がある。こうした思想が琉球に入り、シャコガイに新たな呼称を与え、その本来もつ呪的用法も変化させていくのは、ゲスク時代―古琉球期（二一―一五世紀）とみられる⁽²⁾。追究すべきは琉球方言ではなく、「十字の交叉に呪力を認める思想」をもつ日本語「あざう（糾、又）」であろう。

このほか民俗学からの言及もあるが、ここでは触れない。

2 サルタヒコの分析

サルタヒコは、『古事記』と『日本書紀』に以下のように登場する。

爾に日子番能邇邇藝命、天降りまさむとする時に、天の八衢に居て、上は高天の原を光し、下は葦原中國を光す神、是に有り。故爾に天照大御神、高木神の命以ちて、天宇受賣神に詔りたまひしく、「汝は手弱女にはあれども、伊牟迦布神と面勝つ神なり。故、専ら汝往きて問はむは、『我が御子の天降り為る道を、誰ぞ如此て居る。』ととへ。」とのりたまひき。故、問ひ賜ふ時に、答え白ししく、「僕は國つ神、名は猿田毘古神ぞ。出で居る所以は、天つ神の御子天降り坐すと聞きつる故に、御前に仕へ奉らむとして、参向へ侍ふぞ。」

海人伝承考（木下）

とまをしき。」（『古事記』上巻）

「已にして降りまさむとする間に、先駈の者還りて白さく、^{（一）}の神有りて、天八達之衢に居り。その鼻の長さ七咫、背の長さ七尺余り。当に七尋と言ふべし。且口尻明り耀れり。眼は八咫鏡の如くして、絶然赤酸醬に似れり」とまうす。（中略）天鈿女、乃ち其の胸乳を露にかきいでて、裳帯を臍の下に抑れて、咲噓ひて向き立つ。是の時に、衢神対へて曰はく、「天照大神の子、今降りすべしと聞く。故に、迎へ奉りて相待つ。吾が名は是、猿田彦大神」といふ。（中略）対へて曰はく、「吾先だちて啓き行かむ」といふ。（中略）対へて曰はく、「天神の子は、当に筑紫の日向の高千穂の穂触峯に到りますすべし。吾は伊勢の狭長田の五十鈴の川上に到るべし」といふ。」（『日本書紀』卷第二神代下第九段一書第二）

サルタヒコは、『古事記』、『日本書紀』の天孫降臨の行に登場している。右の資料に第一章の資料を加え、サルタヒコの属性を抽出してみよう。

① 国つ神であり、伊勢の五十鈴の川上を本貫地とし、光り輝く神で、衢で天孫を迎え、道案内をする神である。

② 異形の大男で、比良夫貝に手を挟まれて溺れ死ぬ。

①については、伊勢神宮の起源にかんする岡田精司の研究が参考になる。岡田は、皇太神宮鎮座地の土地神も本来太陽神であったとみている。岡田説に拠ると、「伊勢五十鈴の川上」すなわち皇太神宮鎮座地の土地神であるサルタヒコが、「光す神」として描写されていること、皇孫の降臨を伊勢の土地神が国つ神を代表して迎える状況はわかりやすい。

ところで、サルタヒコは「衢」というポイントを与えられている。衢は分かれ道、辻、複数の道の交叉する場所を意味する。これこそまさに道の「あざこう（糾、又）」場所であり、サルタヒコ故地の名を負うべき地名アザカであろう。現在の阿耶訶比定地が果たして「衢」に匹敵するかどうか知らないが（補註2）、比定地如何によらず、サルタヒコの居場所がアザカでなくてはならなかった理由はまさにここにある、と考えてよいのではないか。

②は、こうした土地神との関係で説明できない部分である。何故サルタヒコが異形の大男で、比良夫貝に手を挟まれて

溺れ死ぬのか、他との関連がつけにくい。

サルタヒコは、伊勢の土地神として皇孫を出迎える一面と、それ以外の面をもって描かれた神、ということができよう。

三、文献からみた隼人

1 中央官人の隼人観

「古代の日向・大隅・薩摩の地域に、狩猟・漁労を中心に農耕生活を営んでいた人々が、長らく文化的にも孤立していたため、中央政府から「夷人雑類」と見做されていたのが隼人」である。南九州人に隼人の呼称が用いられるのは、天武朝（七世紀後半）以降九世紀初頭までであるが、八世紀前半に完成した『古事記』、『日本書紀』には、天武朝をさらに溯った用法が見られる。

仁徳天皇の住吉仲皇子には近習隼人「刺領布」（『古事記』では「曾婆訶理」）がいた。瑞齒別皇子にそそのかされた「刺領布」は住

吉仲皇子を殺害するが、結局それを理由に瑞齒別皇子に殺害される。（『日本書紀』卷第十二履中天皇、『古事記』下巻）

・雄略天皇を丹比の高鷲原陵に葬った時、近習の隼人たちは、昼夜、陵のそばで大声で悲しみ、食物を与えても食わず、七日目に死んだ。役人は墓を陵の北に造り、礼をもって葬った。（同上卷第十五清寧天皇）

・三輪君逆は、隼人に敏達天皇の殞宮を警備させた。（『日本書紀』卷第二十敏達天皇）

上の記事から読みとれるのは、隼人に対する「野蠻で単純な征服された人々」という枠組みである。隼人の祖先神話と、『養老職員令』（八世紀）や『延喜式』（十世紀前半）の隼人司に記された隼人職務から、七、八世紀における中央の隼人観をさらにみていこう。

2 隼人の祖先神話

『日本書紀』によると、火瓊瓊杵尊が木花開耶姫を娶って生まれた二人の兄弟が、火闌降命（兄）と彦火火出見尊（弟）

海人伝承考（木下）

海人伝承考（木下）

である。兄は海の幸を得る力を備え、弟は山の幸を得る力を備えていた。ある日両者は試みに生業を交換するが、弟は兄の釣り針を無くし、兄の許しを得られなくなる。弟は海神の宮でこれを探し出し、海神から潮の干満を自由にできる潮満玉と潮涸玉をわたされる。帰還した弟は海神の教えに従って兄を降伏させる。ここで弟は皇祖、兄は隼人の祖として表現されていることは重要である。潮満玉と潮涸玉に悩まされた兄が弟に許しを請う場面が、いくつかの表現で示される。

・兄は（中略）罪に伏していわれるのに、「私は過ちをした。今後はあなたの子孫の末々まで、あなたの俳優わざおとになりましょう。」と。別伝に「狗人いぬびととして仕えます。どうか哀れんでください」と。（中略）もろもろの隼人たちは、今に至るまで天皇の宮の垣のそばを離れないうで、吠える犬の役をしてお仕えしているである。²³（『日本書紀』巻第二神代下第十段一書第二）

・兄は（中略）救いをもとめていうのに、「（中略）私を助けてくれたら、私の生む子の末代まで、あなたの住居の垣のあたりを離れず、俳優わざおとの民となろう。」（中略）兄はフンドシをして、赤土を手のひらに塗り、弟にいわれるのに、「私はこの通り身を汚した。永久にあなたのための俳優になろう」と。そこで足をあげて踏みならし、そのときの苦しそうな真似をした。始め潮がさして足を浸したときに、爪先立ちをした。膝についた時には、足をあげた。股についたときには、走り回った。腰についたときには、腰をなで回した。脇に届いたときには手を胸におき、首に届いたときには、手をあげてひらひらさせた。それから今に至るまで、その子孫の隼人たちは、この所作をやることがない。²⁴（同上二書第四）

・兄のホデリノ命が頭を下げて言うには、「私はこれからのちは、あなた様の昼夜の守護人となってお仕えいたしましょう」と申しあげた。それで今日に至るまで、（ホデリノ命の子孫の）隼人は、その海水に溺れたときの様々のしぐさを、絶えることなく演じて、宮廷にお仕えしているのである。²⁵（『古事記』上巻）

以上は、隼人が、a.溺れるしぐさを演じる俳優、b.吠える役割をして仕える狗人、c.天皇の守護人、d.天孫と争って破れる海の民、であることを説明している。a・c・dまたは、b・cは一連であるが、aとbは同時に語られない。ま

たは前後の脈絡なく突然話に登場する。神話の重点は、隼人が征服された海の民で、俳優として仕える由来を説く点にあり、狗人の由来にはない。

3 隼人の職務内容

『延喜式』によると、隼人司における隼人の職務内容は、A 朝廷における儀式への参加、B 吠声はせいを発すること、C 竹製品たけの製作にあたることであり、令にみられる隼人正の職掌では、これにD 教習歌舞けうじくが加わる。

このうちB 吠声はせいを発するとは、朝廷の元旦、踐祚大嘗祭などに臨んで今来隼人二十人が吠声はせいを発すること、また天皇の駕行に随行しこれが「国界、山川、道路之曲」に來た時、今来隼人十人が吠声はせいを発することをいう。吠声は「朝儀の遂行を円滑にするための邪力祓禮であり、(中略) 邪靈の特に潜みやすい場所(中略)に於ける邪靈を鎮めるための実修であつた」とされる。Cの竹製品は、宮中消費用の諸用具の製作である。D 教習歌舞は、隼人の風俗歌舞いわゆる隼人舞の修得である。これには隼人の祖先が溺れるしくさを演じ、皇祖に服属を誓う演目も入り、隼人が敗戦による服属という歴史的現実を毎度繰り返す宮廷儀礼であつたとされるが、内容について具体的な記録はない。

『延喜式』にみる隼人の主要な任務は発吠はつはいで、これについての記載は細かく具体的である。これとは対照的に、風俗歌舞の記載はきわめて簡単で、その内容について何の説明もない。隼人の職務の最も重要なのは発吠で、風俗歌舞は従であつたらしい。

4 風俗歌舞

記録にのこる隼人の風俗歌舞表演は、以下の通りである(傍線は筆者)。

養老元(七二七) 大隅・薩摩の隼人等風俗の歌舞を奏す。位を授け、禄を賜う。

養老七(七二三) 大隅・薩摩二国の隼人等六二四人朝貢し、風俗の歌舞を奏す。首帥三四人に位を授け、禄を賜う。

天平元(七二九) 薩摩の隼人等、調物を貢し、風俗の歌舞を奏す。

海人伝承考（木下）

天平勝宝元（七四九）大隅・薩摩両国の隼人等、調物を貢し、風俗の歌舞を奏す。
 宝亀七（七七六）大隅・薩摩の隼人俗伎を奏す。

大隅と薩摩の隼人が民間の歌舞を披露し、これに対して位や禄の与えられていたことがわかる。伝えられる記録では養老元年以降であるが、この時期すでに『古事記』は完成しているので、『古事記』隼人俳優由来譚に対応した隼人の祖先降服の演目が、当時の風俗歌舞には含まれていたと考えられる。隼人の舞に、満潮に溺れる海幸の降服劇と、シャコガイに手をはさまれて溺れる説話劇が同時に含まれていたと考え得る点、注意しておきたい。

5 隼人のイメージ

隼人神話はその風俗歌舞の意味づけを重視し、現実の隼人の職務では発吠が重視される。狗吠、風俗歌舞ともに隼人本来のものであるが、相互に連動しない習俗だったらしい。南九州にすむ隼人には、沿岸地域の人々もいれば、山棲みの人々もいる。後述のように、薩摩と大隅では、墓制も異なる。相互に脈絡のない習俗は、こうした隼人の地域性が反映されているのかもしれない。

中央の隼人観が形成される中、隼人は南九州で叛乱を繰り返していた。文武四（七〇〇）年、大宝二（七〇二）年、和銅七（七二二）年にその記録がある。隼人には天皇に恭順を装う集団のいる一方で、これに抵抗を続ける多くの在地集団がいた。朝廷には、言葉も形質も異なる南方異民族としての隼人に対する恐怖感があつたであろう。

こうした現実を含め、朝廷の抱く隼人像を、①現実と②神話レベルで、以下のようにまとめてみた。

- ① 野蠻で怖ろしいが単純、一部は征服された南の異民族で、狗人として天皇を護衛する。
- ② 征服された海の民で、俳優として溺れるしぐさを演じる。

四、サルタヒコと隼人の共存

『古事記』・『日本書紀』編纂の行なわれたのは、天武・持統・元明・元正朝期に相当する。この時期は律令国家機構の基礎が次々と設定され、天皇制イデオロギーが確立し、伊勢神宮を国家祭祀の対象とする制度が整うなど、国家的枠組の形成時期であつた。隼人による本格的な朝貢が始まり、南九州の人々に対して隼人の呼称がもちいられるようになるのは天武朝であり、「大宝令に初見する隼人司の原型は、すでに天武朝末期に存在していたと考えられ」ている。²⁹この時期、サルタヒコと隼人が、史書編纂の神話世界と現実の政治世界において共存していたことは注意されてよい。

これまでの検討をふまえると、天皇の護衛職務において、隼人とサルタヒコは共通の立場にあるといえる。隼人は行幸に従つて天皇を護衛し、サルタヒコは、天孫を導いて地上に降臨させる役割を果たすからである。隼人がとくに発吠する「国界、山川、道路之曲」を「結界」、「衢」とみなせば、サルタヒコの居場所「衢」に重なる。こうした立場の共通性を背景に、神話的世界を演じる現実の異民族隼人が、神話中のサルタヒコ描写に影響を及ぼしたとみられる二点を指摘したい。

一つはサルタヒコの容貌である。『古事記』においてサルタヒコは、鼻が高く、高身長、口のわきが光り、眼は大きな鏡のようで、赤いほおずきのような顔をした異形の大男に描かれている。形質人類学者の研究によると、四、六世紀の薩摩半島南部沿岸の人々は、低身長、低顔で、縄文人的特徴をもつ人々とされる。³¹すなわち彫りが深く、鼻が高く、円い眼の顔立ちである。海辺の漁労民であれば、肌の色は都人より褐色がかつていたであろう。大きな体軀は宮崎平野部の高顔・高身長の高墳人を投影しているのかもしれない。³²叛乱する恐ろしい異民族として各地の隼人の形質的特徴を誇張すると、サルタヒコになりうる。

他の一つはサルタヒコ溺死の表現と、隼人祖先神の溺れる描写の類似である。『古事記』サルタヒコの溺死表現と、『日

海人伝承考（木下）

本書紀「火闌降命の溺れるしぐさは、沈む主人公と海水レベルの關係を段階的に表現する点で共通する。ただ後者が写實的・演劇的表現であるのに対し、前者は抽象的・文学的である。原型は明らかに後者、つまり隼人による實際の風俗歌舞に求められよう。風俗歌舞には隼人降服劇と並んで、隼人がシャコガイにはさまれて溺れる演目も入っていたとみられ、結果的にこちらの内容が、主人公を隼人海人からサルタヒコにおきかえて、神話にそのまま入り込むことになった」と考へることができる。

シャコガイがサルタヒコにたどり着いたであう過程を整理すると、以下のようになる。中央における隼人の制度・演劇的立場の確立期がサルタヒコの神話的性格づけの確立期に併行すること、また隼人とサルタヒコの天皇にたいする職務の同様であることが、前者が後者に、すなわち現実が神話世界に入り込む垣根を低くしたとみられる。結果的にサルタヒコのイメージに南九州隼人の形質的特徴が入り込み、当時くり返されていた隼人の風俗歌舞の内容の一部が、サルタヒコの物語として神話に採用された。先にのべたサルタヒコのもつ二面の内の、伊勢の土地神以外の一面は、このようにもたらされた、と考えたい。

五、考古学からみた「貝の道」譚の誕生と継承

以下、考古学資料にもとづき、紀元前後における「貝の道」譚の発生から、八世紀の隼人の風俗歌舞に至るまでを検証したい。

1 貝の道のはじまり

二五〇〇年ほど前、九州沿岸民がサンゴ礁域の大形巻貝を求めて、黒潮海域を南下し始める。その動機は、当時北部九州に及んだ中国大陸・朝鮮半島文化に特有の、玉や青銅の美しい腕輪にあった。これに接して玉質素材を求めた西北九州から響灘に至る地域の沿岸民は、おそらく南九州人からサンゴ礁域に分厚い貝殻をもつ巻貝のあることを知らされ、はる

ばるこれを入力して白い玉質腕輪を造つたとみられる。腕輪の素材になつた貝は、ゴホウラ *Tricornis latissimus*、イモガイ *Conus* sp.、オオツタノハ *Patella optima*、これらでつくつた玉質の腕輪が、南海産貝輪である。³³⁾

北部九州平野部に弥生文化の農耕社会が成立すると、農耕民も西北九州から響灘に至る地域の沿岸民からゴホウラ、イモガイを入手し、独自の形状の南海産貝輪を作るようになる。南海産貝輪をはめる習俗は北部九州を基点に西日本一帯に広まり、弥生時代全期間を通じて流行する。この間サンゴ礁域から夥しい数のゴホウラ、イモガイの運ばれたことが、九州・西日本の弥生遺跡でみつかる南海産貝輪によつて知られる。ゴホウラはサンゴ礁の深い海底に生息し、また腕輪にするほど大きなイモガイの採取は容易でない。多くの貝殻消費には、琉球列島の人々の協力、彼らとの交渉、これを運ぶ人々の組織化、交換品の準備、中継地の設営など、一連の組織的経済行為が必要であつた。これを実行したのは、北部九州弥生社会の中心的存在である奴国であつたとみられる。こうした組織的な貝殻交易を示す海上ルートをも、貝の道とよんでい

る。奄美・沖縄諸島の弥生時代併行期遺跡では、十数個のゴホウラやイモガイがきれいに積まれたままみつかることがある。こうした遺跡では、ふつう弥生土器や弥生文化特有の遺物（青銅器破片やガラス玉など）が出るので、南島人と弥生人との間に一定の文物の交換、おそらくは交易が行なわれたと考えられる。弥生人と島人との貝殻の交易を貝交易と呼んでい

2 「貝の道」譚の誕生と継承

貝の道を支えた中心的消費者は、北部九州農耕民であつたが、実際に海上を往復して貝殻を運搬したのは、九州沿岸の海人たちであつた。南海産貝輪を分析し、あわせて琉球列島にのこされた石棺墓や、薩摩半島の貝類集散地を示す遺跡、奄美・沖縄の遺跡・遺物の検討を通して、彼らの行動の軌跡を描くことができる。北部九州と南島をむすぶ貝の道は、弥生時代前半には、五島列島や平戸の西北九州沿岸民を主体に、九州西海岸を大回りして南九州に到り、薩摩半島西海岸を

海人伝承考（木下）

前線基地として、鳥づたいにサンゴ礁の島嶼につながっていた。しかし弥生時代後半になると、外海を大回りするルートは衰退し、不知火・有明海經由の内海ルートから薩摩半島に到り、南下するルートに変化する。これによって、貝交易に携わる海人たちも、西北九州沿岸民から中・南九州沿岸民へと変化していったとみられる。ただ、その中継点である薩摩半島は一貫して貝交易にかかわっていた。薩摩半島西海岸遺跡の存続とともに、沖縄諸島に弥生時代各時を示す薩摩の土器のみられることが、これを示している⁽²⁵⁾。言語・海上の知識・経験において、薩摩半島の海人は、貝交易の最前線を担うべき力量を、備えていたのだろう。

海人がどのように南下したのか、当時の舟がどのようなものであったかは不明である。人々はおそらく簡単な帆をもった半構造船を操り、潮目や風向きをみながら、島伝いにゆつくりと黒潮を遡っていったのだろう。西北九州・南九州の海人たちは、北風の吹く秋口に南下を始め、冬には目的地に達して貝交易の交渉を始め、南風の吹く春先、今度は北にむけて貝を積んだ船を漕ぎ出したであろう。沖縄本島木綿原遺跡でみつかった箱式石棺墓内の男性は、南島人の形質をもっていた⁽²⁶⁾。

九州様式の墓に葬られた南島人の存在は、彼が両地域の混血であることを思わせた。彼らの南島滞在はこうした現象を生むに十分な時間だったのである。浜辺の宿りがシャコガイの失敗談——「貝の道」譚——を生んでも、不思議はない。

弥生時代末、ヤマト政権成立にむかう動乱の影響で貝交易も変化を余儀なくされたが、貝の道の往来が途絶えることはなかった。古墳時代になると、貝交易の主催者はヤマト政権となり、この下で中九州の豪族が貝交易を中継し、海上運搬は肥後と薩摩の海人が弥生時代同様に担当したと考えられる。シャコガイの失敗を繰り返す海人はとうにいなくなっていたであろうが、「貝の道」譚は伝承されたであろう。あるいは風俗歌舞の一つに変形していたかもしれない。

3 伝承の主体

古墳時代の南九州人は、在地の墓制から、三つの地域グループに分けられる（図2）。それらは1. 地下式横穴墓をもつ人々、2. 地下式板石積石室墓をもつ人々、3. 立石土壙墓をもつ人々で、いずれも隼人とみられている。1の地下式

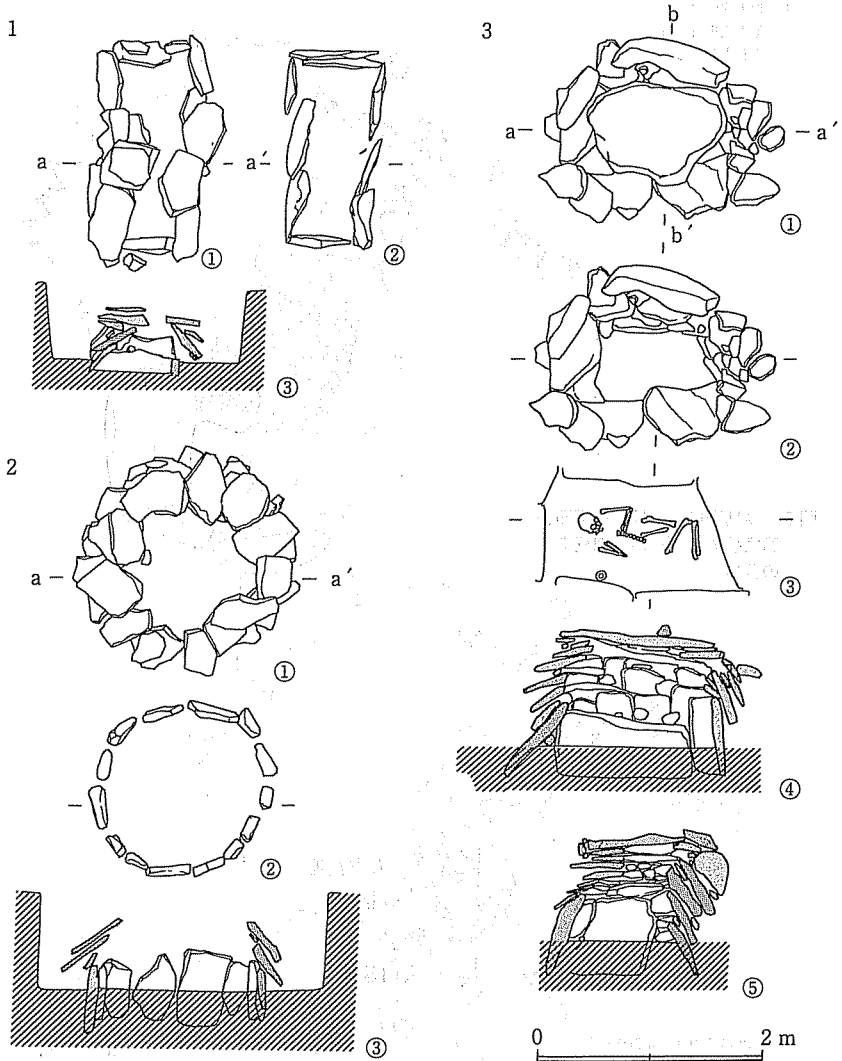
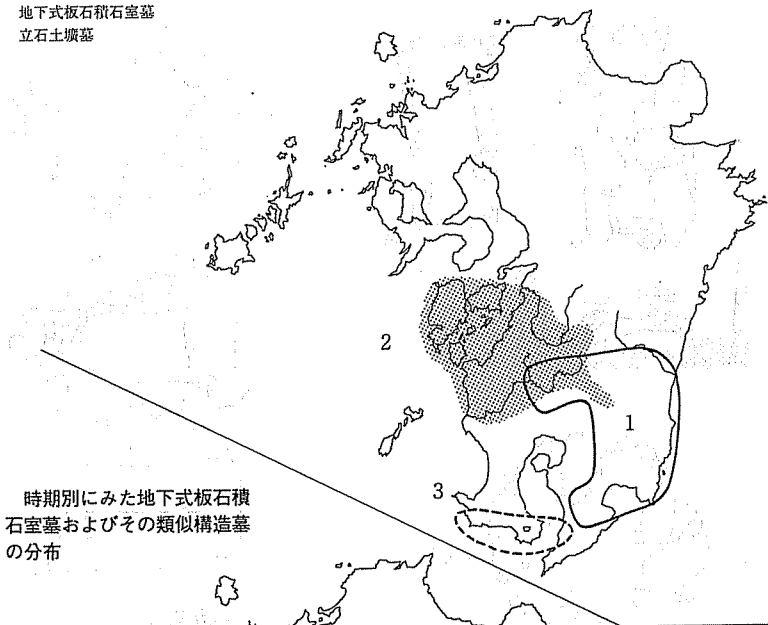


図1 地下式板石積石室墓・その類似構造墓

1. 堂前1号石棺 (①上面、②珪石を除去した状況、③a-a'断面) 註45文献第12回をもとに作成、地下式板石積石室墓
2. 別府原2号 (①上面、②珪石を除去した状況、③a-a'断面) 註45文献第3回をもとに作成、地下式板石積石室墓
3. 浜郷1号石棺 (①上面、②上石を除去、③珪石を除去、④a-a'断面、⑤b-b'断面) 小田富士雄1983『九州考古学研究 弥生時代篇』第233回をもとに作成。地下式板石積石室墓の類似構造墓

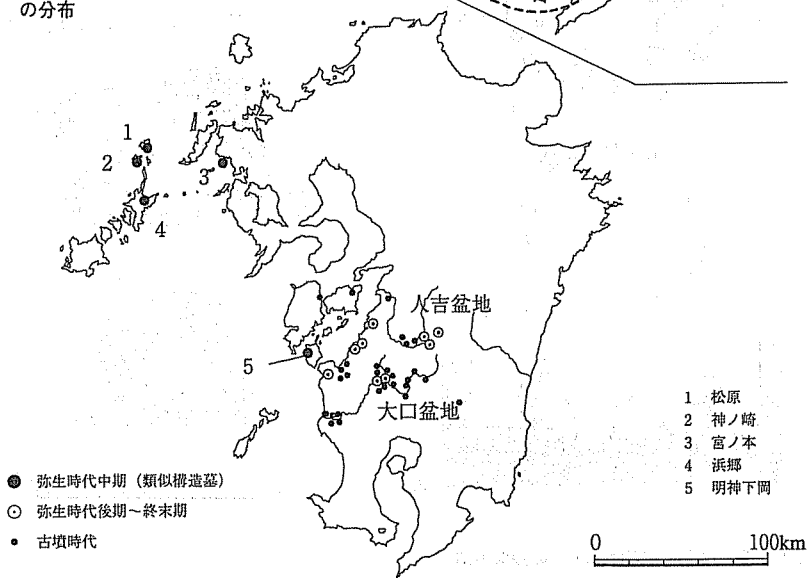
図2 古墳時代南九州の三つの墓制分布

- 1 地下式横穴墓
- 2 地下式板石積石室墓
- 3 立石土壙墓



海人伝承考(木下)

図3 時期別に見た地下式板石積石室墓およびその類似構造墓の分布



- 弥生時代中期(類似構造墓)
- 弥生時代後期～終末期
- 古墳時代

- 1 松原
- 2 神ノ崎
- 3 宮ノ本
- 4 浜郷
- 5 明神下岡

0 100km

図5 免田式土器の分布
(弥生時代後期～古墳時代初頭)

海人伝承考(木下)

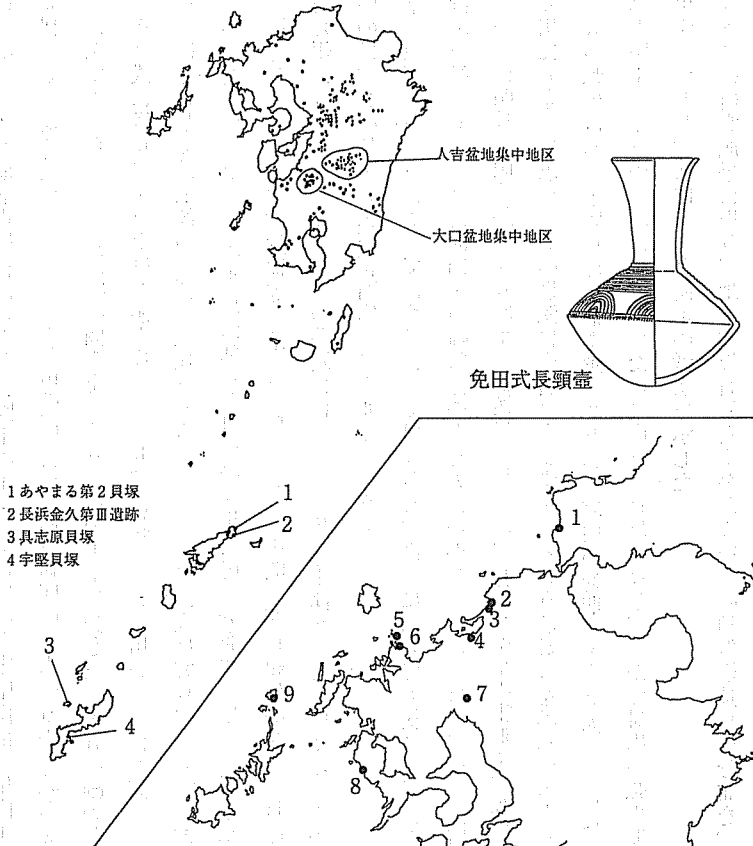
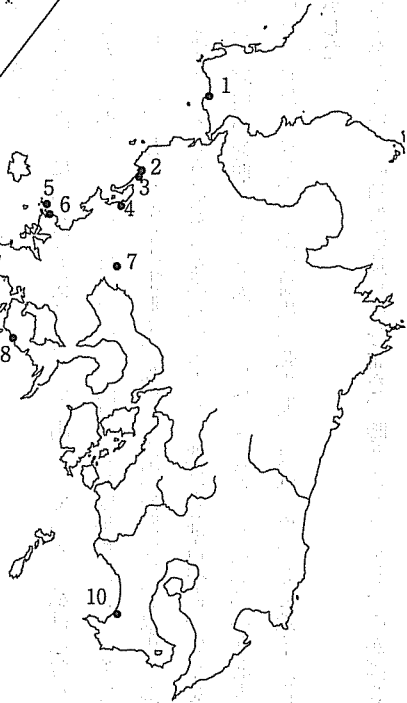


図4 南海産貝論(まる型)の分布
(弥生時代前～中期)

- 1 中ノ浜 (イモガイ)
- 2 夜白・三代地区遺跡跡内貝塚 (ゴホウラ)
- 3 夜白貝塚 (イモガイ)
- 4 姪ノ浜 (オオツタノハ)
- 5 小川島 (ゴホウラ)
- 6 大友 (ゴホウラ、イモガイ、オオツタノハ)
- 7 二塚山 (イモガイ)
- 8 出津 (イモガイ)
- 9 松原 (オオツタノハ)
- 10 高橋 (ゴホウラ、イモガイ、オオツタノハ)



海人伝承考（木下）

横穴墓は「東南九州に波及した畿内の古墳文化に触発されて発生した隼人の葬制で、五世紀の半に始まり、八世紀頃まで行なわれた」⁽⁹⁾。2の地下式板石積石室墓（図1の1・2）は、「熊本県南部、川内川流域、天草諸島、長島に分布する隼人の葬制」で、「地下約一・二—一・八mの深さに、高さ約四〇—六〇cmの板状石を楕円形または円形、或は長方形または方形に立てめぐらして、石櫛状の囲みをつくり、その上部に長さ三〇—五〇cmの菱形または長方形に割り欠いた板状石を持ち送り式に櫛状に積み上げ空洞を作る。天井部は特に大石を用いず鍔積と同様な一枚石を架し、その構造は崩れやすい。追葬にさいしては上部の鍔積を数枚はずすことによつて出入は容易である」⁽¹⁰⁾。四世紀から六—七世紀の墓制とみられる。3の立石土壙墓は、「薩摩半島南部及び対岸の大根占町に分布する隼人の群集墓である。墓域の一隅に立石を設け、遺体を埋葬した後、土器、鉄器等を地表に供献する。（中略）四世紀に始まり六世紀に及んでいる」⁽¹¹⁾。すなわち四—六世紀の南九州には、少なくとも三つの墓制に代表される隼人集団がいたといえる。このうち貝の道にかかわった可能性の最も高いのは、2の地下式板石積石室墓のグループである。

地下式板石積石室墓についてはすでに多く研究され、系譜に関しても複数の考えが出されている⁽¹²⁾。私は乙益重隆⁽¹³⁾、河口貞徳⁽¹⁴⁾両説を継承発展させた河口・戸崎勝洋⁽¹⁵⁾の考え方にひかれる。これは、二つの遺跡の調査成果を綜合する形で説かれている。一つは明神下岡遺跡⁽¹⁶⁾の調査成果を根拠に、地下式板石積石室墓の祖形を、弥生時代の類似構造の石棺墓（図1の3、西北九州に分布）に求め、その根源に支石墓を想定するという乙益説を継承する考え、他は堂前古墳群の成果を根拠に、葺石をもつ弥生後期の土壙墓に祖形を求めるといふ河口の初期の考えである。戸崎はこれらを合わせ、「西北九州における明神下岡Iタイプの墓制は、島嶼づたいに南下し長島に達し、やがて対岸の弥生期の墓制と融合して地下式板石積石室が発生する」⁽¹⁷⁾とし、河口もまた同様の考えを示した⁽¹⁸⁾。

これまでの研究成果に拠り、地下式板石積石室墓およびその類似構造墓の分布を、時期ごとに示したのが図3である⁽¹⁹⁾。弥生時代中期には、類似構造の墓が西北九州から南九州の島嶼に分布し、弥生後期—終末期には九州島に登場して川沿い

に内陸に到り、古墳時代には内陸深く展開する様子がわかる。

図4は、弥生前～中期の南海産貝輪の、私がとくに海人の貝輪と分類したものの分布である。図4と、図3の弥生時代中期の墓の分布を比べよう。両者の分布が五島列島から南九州西岸部で重なっていることがわかる。分布の重なりは、地下式板石積石室の類似構造墓を墓とする人々、すなわちここに本拠地をおく海人が、弥生前～中期の貝交易に携わっていたことを示唆する。

図5は、弥生時代後期～古墳時代初頭の九州中南部に特徴的にみられる特殊な土器、免田式土器の分布状況である。出土地点は熊本平野、人吉・大口盆地に集中している。これと、時期の重なる地下式板石積石室墓分布（図3の二重マル）を比べてみよう。墓の分布は土器の分布圏内にすっぽり入り、人吉・大口盆地に重なっていることがわかる。ここで免田式土器が、奄美大島・沖繩諸島の四遺跡でみつかっている事実は注目してよい。つまり南島の免田式土器は、地下式板石積石室墓の人々を紹介したもたらされた可能性が高いといえるのである。

地下式板石積石室系統の墓をもつ海人は、朝鮮半島系文化を継承しつつ、弥生時代から古墳時代にかけて、その中心的活動地域を西北九州から南九州に移して、継続的に貝の道を担っていたとみてよさそうである。この考えは、南海産貝輪の始まりが朝鮮半島系文化に求められるとした考古学的予察、さらに弥生時代の貝運搬ルートが、前半の西北九州まわりの外海ルートから、後半の不知火・有明海経由の内海ルートに変わったとする先の指摘と矛盾しない。『肥前国風土記』の伝える七く八世紀の値嘉（五島列島内島名）の白水郎（漁民）が「容貌、隼人に似て、恆に騎射を好み、其の言語は俗人に異なり」は、「地下式板石積石室系統の墓をもつ海人」の歴史にこそ対応しよう。

シヤコガイ失敗譚は、地下式板石積石室墓系統の墓をもつ海人によって伝承されてきた、とみていいだろう。古墳時代に彼らが南九州内陸部に居所を求め、やがて生産力を蓄えた一族がヤマト政権と結び、隼人と呼ばれるようになった時、この話も中央に登場した、と考えたい。

海人伝承考（木下）

六、「貝の道」譚の説話化

古墳時代の貝交易は、基本的に七世紀初頭まで継続し、七世紀前半突然断絶する。中央政権の政策転換により、南島の貝の受容が一挙に消滅したためである。この時期朝廷では、聖徳太子と蘇我馬子が、推古女帝のもとで仏教興隆を進め、憲法を制定し、官職制度の整備を促進していた。七世紀前半以降南海産貝製品の流行は二度と復活せず、九州・南島間の交易関係も長く途絶える。「貝の道」譚が説話化していくとすれば、七世紀半ば以降であろう。

シャコガイ失敗譚は隼人によって中央に伝えられたとみられるが、当然それ以外にも、貝運搬に関わった海人の居住地域である西北九州から南九州一帯の沿岸部に伝承していただろう。これにかかわる興味深い資料が『今昔物語集』巻第二十九にある（傍線筆者）。

「（前略）山際近キ浜ナレバ、猿ノ海辺ニ居リタルケルヲ、此ノ女共見テ、（中略）此ノ女二人烈テ歩ビ寄ルニ、猿逃ケテ行キナムズラムト思フニ、怖シ氣ニハ思タル物カラ、難堪氣ニ思テ、否不去テカカメキ居ケレバ、（中略）溝貝ト云フ物ノ大キナルガ口ヲ開ケテ有ケルヲ、此ノ猿ノ、取テ食ハムトテ、手ヲ差シ入レタリケルニ、貝ノ覆ヒテケレバ、猿ノ、手ヲ咋ヘラレテ否不引出サデ、塩ハ満ニ満来ルニ、貝ハ底様ニ堀入ル。（後略）」（「鎮西猿撃殺鷲為報恩与女第三十五」）
 訳：このあたりは山裾に近い浜だったので、猿が海岸に降りて来ているのをこの女たちが見つけ（中略）、この女二人連なつて近づいて行った。猿は逃げて行くだろうと思つたところ、こわがる様子は見せながら、何か苦しそうにして逃げもせず、きいきい叫んでいる。（中略）大きな溝貝という貝が口をあけていたのを、この猿が取つて食おうと手をさし入れたとたん、貝が閉じたので、猿は手をはさまれ、引き抜くこともできずにいるのだつた。潮が満ちて来るにつれ、貝は底の方にもぐり込んで行く。

「溝貝」はオオミヅガイかとされるが、シャコガイであろう。「溝貝」とは、口を半開きにして失敗を誘つた貝に対する、きわめて的を得た命名である。話が体験に基づいて語られていた時の語感をなお留めているように、私には思える。

『今昔物語集』の成立は一二世紀初頭とされるので、これが「貝の道」譚を素材の一つにしているとすれば、八世紀初頭からさらに四〇〇年の間、九州の海浜集落で伝承されていたことになる。舞台は「鎮西」とのみ記され、九州のどこであるかわからないが、「貝の道」譚を追究してきた目には、山が海にせまる西海岸の風景が浮かぶ。私はこの話を読んで、あるいは海人たちは、シャコガイを長く「溝貝」と呼んでいたのではないか、とさえ思った。

おわりに

小稿は、『古事記』の「比良夫貝」がシャコガイであるという前提と、シャコガイ失敗譚は弥生時代の貝交易海人集団内に生まれた、という予測のもとに、その検証を試みつつ、物語の発生と継承、変化を追究した試論である。前提あつての立論なので、論の限界は見えているといえるかもしれない。ただ南九州に的をしぼった作業結果が、貝輪研究で得たこれまでの予測と矛盾しなかつた点は、私にとつてささやかな成果であつた。

『今昔物語集』鎮西猿の話は、梅光女学院大学宮田尚教授から教えていただいた。最近の活発なサルタヒコ研究状況について、三重大学目崎茂和教授の教示を得た。またシャコガイについて、千葉県県立中央博物館の黒住耐二研究員、沖縄県農林水産部の久保弘文氏の教示を仰いだ。神社本庁研修教務室木田孝朋氏には文献の提供を受けた。末筆ながら併せて御礼申し上げる。

註

- (1) 倉野窓司・武田祐吉一九五八『日本古典文学大系1 古事記 祝詞』岩波書店、一三二頁。筆者傍線。
- (2) 次田真幸一九七七『古事記(上)』講談社学術文庫207、一八四頁。括弧内は筆者注。

海人伝承考(木下)

- (3) 本居宣長一七九八「古事記傳」。現代の注釈の多くもこれを引く。
- (4) 南方熊楠一九二〇「猿に関する民俗と伝説」『十二支考』2、平凡社東洋文庫所収、二六二―二六五頁。
- (5) シャコガイについては、以下の文献を参照した。
- ・白井祥平一九七七「原色沖繩海中生物生態図鑑」新星圖書、三八七―三九一頁。
 - ・奥谷喬司一九八〇「海の貝50種」ニューサイエンス社、九二―九三頁。
 - ・久保弘文・黒住耐一九五五「沖繩の海の貝・陸の貝」沖繩出版、一八四―一八七頁。
 - ・本川達雄一九八五「サンゴ礁の生物たち」中公新書七六六、中央公論社。
- (6) 男性の名にみえることを、本居宣長が指摘している。「日本書紀」に大伴毘羅夫連、巨勢臣比良夫、額田部連比羅夫、倭漢直比羅夫、阿部引田臣比羅夫など。
- (7) 木下尚子一九八二「弥生時代における南海産貝類の生成と展開」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』、四一三―四四三頁。木下一九九六「古墳時代南島交易考」『考古学雑誌』八一巻一号、日本考古学会、一―八一頁。
- (8) 瀧川政次郎一九六八「伊勢海の安曇族と磯部族」『神道史研究』第六十巻第四号、二―三五頁。瀧川は、シャコガイの指摘が興玉神社宮司杉房雄氏に拠ることを述べている。
- (9) 梶山彦太郎一九七八「ひらぶ貝(上)」『ちりばたん』第一〇巻四号、一〇三―一〇六頁。梶山一九七八「ひらぶ貝(中)」『ちりばたん』第一〇巻五号、一二八―一三〇頁。梶山一九七九「ひらぶ貝(下)」『ちりばたん』第一〇巻六号、一六二―一六四頁。
- (10) 伊波普猷一九二二「猿田彦神の意義を発見するまで」琉球語「サタルの研究」より『琉球新報』。後、「猿田彦神の語源を発見するまで」琉球語「サタル」の研究より『國學院雑誌』二八巻五号に掲載。「伊波普猷全集」第七巻、平凡社、一六九―一八七頁所収。このほか「猿田彦の話」『週刊朝日』一九三三年六月、にも同様の内容が記される。
- (11) 松村武雄一九五五「天孫降臨の神話」『日本神話の研究』第三巻「個別的研究篇(下)」一五五―一五九頁。
- (12) 谷川健一「一九七二「シャコ貝幻想」『季刊・歴史と文学』二、一九七二「孤島文化論」潮出版社、一七九頁。
- (13) 谷川健一「一九七四「サルタヒコの誕生」『流動』三月号、一九八一「谷川健一著作集」第四巻、三一書房、に再録、一一〇頁。
- (14) 註13文献、一〇九頁。
- (15) それだけの単純なモチーフの話であれば、日本でも探すことができる。「猿が時々磯において来て、貝を拾ってその肉を食うそうでありますが、貝を貪り食っている間に、沙が満ちて来て、溺れて死んでいることがある」(註11文献三三頁)。「甲子夜話」巻十七の十三「獣に人心あり」には、平戸神崎の海浜で「猿石間の蛇を取らんとせしを、蛇その手をしめつけて岩にはさまり、動く」と協はざるなり」とある。中村幸彦・中野三敬校訂一九七七「甲子夜話」上、平凡社東洋文庫300、二九七―二九八頁。
- (16) 木下一九九二「辟邪の貝―しゃこがいがい考」『比較民俗研究』六、筑波大学比較民俗研究会、五―三九頁。
- (17) 向山勝貞一九九〇「薩南諸島の信仰と儀礼」『海と列島文化』5、小学館、四九一―五一五頁。
- (18) 註1文献、一二七頁。

- (19) 註2文献、一三二―一三四頁。
- (20) 岡田精司一九七〇「伊勢神宮の起源」『古代王権の祭祀と神話』塙書房、三三六―三三七頁。岡田は伊勢神宮のある度会地域が、本来「太陽神の降臨する聖地」として崇拜されていたとし、一方「畿内周辺で海の上に日の出の望まれる地方は、伊勢・志摩だけであり、大和で古くから太陽崇拜」が行なわれていたならば、伊勢の地は大和の人々から一層神聖視されたに違いない」と併せて、「特に、伊勢の度会が、の地が皇太神宮の鎮座地として選ばれたのは、(中略)太陽神の聖地としての伝統が重要な条件となっていたに違いない」としている。
- (21) 梶山彦太郎も「糾う」に注目して、これがシャコガイへの命名の根本ではないかと指摘しているが、これを「色彩に富んだ外套膜を出し、石サンゴに埋まつている姿は、正に五色の纖維でアザナッタ水中の繩であろう」とみている点、筆者と考えを異にする。
- (22) 梶山彦太郎一九七八「ひらぶ貝(上)」『ちりばたん』第一〇巻四号、一〇五頁。
- (23) 井上辰男一九九〇「隼人」『国史大辞典』第一巻、吉川弘文館、六九〇頁。
- (24) 宇治谷孟一九八五『日本書紀(上) 現代語訳』講談社学術文庫、八一―八二頁。
- (25) 註23文献、八七―八八頁。
- (26) 註2文献、二〇五頁。
- (27) 隼人については、以下の文献を参照した。
- ・井上辰雄一九七四「隼人と大和政権」学生社。
 - ・大林太良編一九七五『日本古代文化の探究 隼人』社会思想社。
 - ・中村明蔵一九七七「隼人の研究」学生社。
 - ・大林太良・谷川健一編一九七七「特集西南日本の古代文化」『東アジアの古代文化』大和書房。
 - ・上村俊雄一九八四「隼人の考古学」考古学ライブラリー³⁰、ニューサイエンス社。
 - ・鹿児島県歴史資料センター黎明館一九八八「南九州の墳墓」。
 - ・永山修一九九二「古墳時代の「隼人」」『隼人―古墳時代の南九州と近畿』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館、五七―六〇頁。
 - ・小島環禮一九九〇「海上の道と隼人文化」『海と列島文化5』小学館、一三九―一九四頁。
 - ・中村明蔵一九九八「古代隼人社会の構造と展開」岩田書院。
- (28) 林屋辰三郎一九六〇「中世芸能史の研究」九二―九七頁。
- (29) 註26永山一九九二文献、五八頁。
- (30) 註29に同じ。
- (31) 池田次郎一九九八「日本人のきた道」朝日選書614、朝日新聞社、二九一頁。金関丈夫は、薩摩半島南端成川遺跡の古墳時代前半

海人伝承考(木下)

- 人骨の特徴を「いちじるしい短頭」で、「顔が低い、(中略)下肢ことに脛骨が長い(中略)、今日のサツマ地方人とよくにている」とした。金岡一九七三「第五章 人骨」「成川遺跡」文化庁、一一五—一六頁。
- (32) 松下孝幸の地下式横穴墓人骨に基づく研究によると、宮崎平野古墳人は短頭・高顔・高身長・鼻根部はやや平坦という形質的特徴をもち、低顔・低身長・山間部古墳人とは区別されるといふ。松下孝幸一九九〇「南九州地域における古墳時代人骨の人類学的研究」『長崎医学学会雑誌』六五巻四号、七八—一〇四頁。
- (33) この所作については、まったく違う解釈がある。「猿田比古の命が水中に溺れたのも、もと信仰行事の意味のもとに行なはれたことを、第三者から見ても、水に溺れるといふ解釈が下されたものであらう」。武田祐吉一九五四「古事記話語群の研究」明治書院、三五—一頁。「水に溺れ惑ふ様態を演ずる劇的舞踏は、上代日本民族の間に可なりポピュラーであったらしい。隼人舞はその一であり、(中略)猿田彦が伊勢の阿邪詞で比良夫貝に手を咩ひ合わされて海潮に溺れたといふ神話的傳承の如きも、這般の舞踏の先存を予定してはじめてよく理會し得られる」、松村武雄一九五五「海幸・山幸の神話」『日本神話の研究』第三卷「個別的的研究篇(下)」—七四九頁。「隼人の中でも海洋的性格をもつ阿多隼人が海辺で身を清めて、神招ぎする様子」、中村明蔵一九八六「熊襲・隼人の社会史研究」名著出版、三三三頁。
- (34) 弥生時代の貝交易については註10木下一九八二文獻、ならびに以下を参照されたい。木下一九九六「南島貝文化の研究」一一三—一三七頁。
- (35) 中園聡・上村俊雄一九九八「沖繩出土弥生土器の検討」『日本考古学協会第64回総会研究発表要旨』日本考古学協会。藤尾慎一郎一九九九「貝の道以前—弥生早・前期の琉球と九州の交流」『日本人と日本文化—その起源をさぐる』No.9、九頁。
- (36) 佐野一九七八「木綿原遺跡出土の人骨について」『木綿原 沖繩県読谷村渡具知木綿原遺跡発掘調査報告書』読谷村文化財調査報告書第5集、沖繩県読谷村教育委員会・読谷村立歴史民俗資料館、一一二—一四頁。
- (37) 古墳時代の貝交易については註10木下一九九六文獻、ならびに以下を参照されたい。木下一九九六「南島貝文化の研究」法政大学出版局、二四一—三八五頁。
- (38) 隼人の呼称は、その用例からは仁徳天皇以降、すなわち五世紀以降のヤマト政権に降った南九州人についてのべるのが適當であるが、ここでは説明の都合上、四世紀の南九州人についてもこの呼称を遡及させる。
- (39) 河口貞徳一九八八「南九州に於ける弥生・古墳時代の墓」『南九州の墳墓—弥生・古墳時代—』鹿児島県歴史資料センター黎明館、六頁。
- (40) 註39文獻八頁。
- (41) 乙益重隆一九八二「付編 地下式板石積石室墓について」『妻ノ鼻墳墓群』本渡市文化財調査報告書第1集、本渡市教育委員会、六三頁。
- (42) 註39文獻八—九頁。
- (43) 地下式板石積石室墓の研究史は、西健一郎一九八八「地下式板石積石室墓の基礎的研究」『九州文化史研究所紀要』第三三号、一

六七、二〇九頁に丁寧にとめられている。

(44) 乙益重隆一九七一「地下式板石積石室墓の研究」『国史学』第八三号、国史学会。

(45) 河口貞徳・上村俊雄一九七一「別府原古墳・堂前古墳調査―地下式板石積石室について―」『考古学雑誌』第五七卷一、二四、六四頁。註42文献に同じ、六、九頁。

(46) 戸崎勝洋一九八六「古墳時代」『鹿児島考古』第二〇号、鹿児島県考古学会、四一―五二頁。

(47) 戸崎勝洋・牛ノ浜修・宮田栄二一九八六「明神下岡遺跡」『長島町埋蔵文化財発掘調査報告書』(一)、長島町教育委員会。

(48) 註46文献、四三頁。

(49) 河口貞徳一九八七「隼人の埋葬」『鹿児島考古』第二二号、一―三二頁。註39文献八頁。

(50) 図1は、以下の資料に基づいて作成した。上村俊雄・本田道輝一九八四「第1図 鹿児島県地下式板石積石室墓分布図」『肥後考古学会・鹿児島県考古学会連合学会資料』六三頁ならびに同「地下式板石積石室墳および類似構造墓一覽」七四―七五頁。森山栄

一九八四「熊本県の地下式板石積石室墓について」『肥後考古学会・鹿児島県考古学会連合学会資料』八二―九〇頁。河口貞徳一九八七「隼人の埋葬」『鹿児島考古』第二二号、一―頁。

(51) 木下一九九六「南海産貝輪着装習俗の構造」『南島貝文化の研究』法政大学出版局、七九―一〇一頁。木下一九九九「貝の道の人々」『新弥生紀行―北の森から南の海へ―』国立歴史民俗博物館、朝日新聞社、一〇九―一〇〇頁。

(52) 免田式土器は、日用土器とは形態の異なる、装飾性豊かな土器で、多くは墓のみつかる。図3は、熊本県立装飾古墳館「弥生人の祈り―免田式土器の謎―」第3回企画展図録を参考に作成。

(53) 中村直子一九八八「免田式土器考」『人類学研究』第七号、人類史研究会、七一―八二頁。

(54) 秋本吉郎校注「風土記」『日本古典文学大系』2、岩波書店、四〇一―四〇三頁。

(55) 森正人一九九六「新日本古典文学大系37 今昔物語集五」岩波書店、三七四頁。傍線は筆者。

(56) 馬淵和夫・国東文麿・今野達一九七六「今昔物語四」小学館、四四一―四四二頁。

(57) 註56文献注釈二十七、四四一頁。

補註1

脱稿後、貝類学者の久保弘文氏から次の内容のコメントをいただいた。

ヒメジャコは岩に穿つため、貝殻の開閉度合いが小さく、人を挟む貝としては余りふさわしくない。シラナミの方が開閉度合いは大きい、ヒレジャコはもつと大きい。挟まれ易さからシャコガイを並べると1位シャゴウ、2位ヒレジャコ、3位シラナミ、4位ヒメジャコとなる。生態的にはいずれの種も潮が引いたとき、観察できる。ヒレジャコはモート(サンゴ礁内側の浅海)内の水面すれすれに棲んでいる。さざ波だつているときは見えにくいので、モートをバチャバチャ歩いていて、これは何かと手探りで覗くときとうっかり挟まれることはあるかもしれない。分布的に考えると、一番北まで生息し、有力なのはシラナミ。これは北のほうでは

海人伝承考（木下）

裾礁が多くなるため、リーフ外の環境に棲むシラナミの生息にむいているためである。私は挟まれ易さではヒレジャコ、分布や産出状況からはシラナミがあげられるのではと思う。

私（木下）は自分の体験に引きずられてヒメジャコとシラナミばかりを対象に考えていたが、シャゴウ、ヒレジャコも候補に入るべきであることを知った。

補注²

地理学者の目崎茂和は、日本列島の山並みの方向が、伊勢を境に東は南北、西は東西であることに注目して、伊勢を日本の「八衢」、¹「十字」の「地理的イメージ」で捕えうると、ダイナミックに指摘する（鎌田東二編著一九九七『謎のサルタヒコ』創元社、四二―四六頁）。こうした内容は、歴史地理的に、阿耶訶に比定される二つの阿射賀神社の地（松崎市小阿坂町および大阿坂町）についても成立し得るだろうか。